

嘘の價值

巖谷小波

▲今日は盆の十六日だ。地獄では釜の蓋が明くと云ふではないか。イヤ地獄と云へば、閻魔は嘘が大嫌ひで、嘘をついた者は、皆舌を引抜くと云ふ。それに付いて、この娑婆で僕聊か説ありだ。

▲成る程、嘘つきは泥棒の初まりと云つて、無論良くない事に相違無い。が、その嘘にもよりけりで、一概にはさう云はれまいと思ふ。

▲全体嘘に二種ある。一は嘘らしい嘘、二は真らしい嘘だ。嘘らしい嘘とは、誰が聞いてもすぐ嘘と解る嘘、真らしい嘘とは、何人もつい信用する嘘だ。

▲向ふ横町で今掏摸が捉まつて、大勢に撲られて居るぞ。好い氣味ぢやないかと、口から出まかせ

に云つても、直ぐ真に受けて、ドレ〜行つて見ろ、行つて見ると、野次馬はすぐ駈け出すだらう

……………これは真らしい嘘の例だ。

▲先刻裏の山へ行つて見たら、雷が太鼓を枕にして、グウ〜晝寢をして居たぜト云つても、誰もそれを本氣に聞て、まだ居るか知らん、見て來てやらう、杯と出て行く馬鹿があらうか。……………嘘らしい嘘とはかう云ふ物だ。

▲其所で前の嘘に對しては、詐された人が屹度腹を立てやうが、後の嘘に對しては、寧ろ臍の皮を捻るだらう。……………それ前者は憎むべく、後者は愛すべき所以である。

▲今一つ例をあげて見れば、彼の讀本の「狼來れりは」即ち前者に屬するもので、曾呂利の御前お伽噺の如きは、後者の粹とも云つて可からう。

▲此點から云ふと、眞らしい嘘は罪になるが、嘘らしい嘘は却つて無邪氣なもの。閻魔も前者の舌こそ抜け、後者には寧ろ手を拍つて、?更に次を所望するかも知れない。

▲されば彼のお伽噺の如きも、即ち嘘らしい嘘として、無邪氣に、可憐に、愛らしくこそあれ、之に對して肩を擧め、乃至額に筋を立つるものが、何所の國にある。

▲然るに何事ぞ、此頃何とやら云ふ博士殿は、何所やらの演説で、お伽噺類を排斥し、精神病者の多いのに、之に依て迷信を養成されるからだと言はれたげな、天晴れの誤迷論、僕等は只アツと云ふ斗りだ、

▲世の中には、牛乳飲み過ぎて、腹を下だす人もある、而も衛生局は、牛乳を有害物として、之が

飲用を禁じては居ない。

▲衆生濟度の難有い御宗旨も、凝り過ぎると飛んだ氣紛れ者を出す、而も内務省は、佛寺教會に鐵柵を結つて、之が參詣を禁じては居ない。

▲お伽噺は成る程嘘斗りだ、が、それは皆嘘らしい嘘、即ち邪氣の無い嘘斗りだ、偶々子供心に之を信じたとしても、一方に學校と云ふものがあつて科學教育に脱目の無い以上、誰が何時まで此の嘘を信じて、智識の發達を妨げられやう。それを彼是案じるのは、所謂子供心を解せぬと云ふもの。愚にも付かない取越苦勞だ。

▲又空の穴の狭い先生方は、子供の空想を助長すると云つて、此種の讀物を嫌ふ様だが、此等も一知半解の迂論、所謂道學先生の鼻元思案で、實に臍茶の至である。

▲空想！ 空想が何故悪いだらう、何ぞ知らんこの空想がやがて理想となり、果は實行を促す基となる。此位大切なものは無いのだ。

▲ふ伽噺には、一ト跨ぎに三千里を飛ぶ靴がある……此空想に興味をもつた子供、大きくなると理學を研究して、一時間何十哩の汽罐車を發明する。

▲ふ伽噺で龍宮に遊んだ愉快は、他日の海底旅行を企てしめ、或は北極探險を思ひ立たせる、此皆空想の賜物では無いか。

▲有体に白状すれば、僕の如きは子供の時分に非常な迷信家であつた。幽霊、妖怪のある事を信じ天狗、山男のある事を信じ、狐の人を誑す事、狸の入道に化ける事、魔法の事、呪咀の事、皆信用したものだ。

▲然し今日の僕は、決してさう云ふ迷信家ではない。が、かう云ふ良からぬ迷信でさへ、或る點までは詩的の趣味を感じて居る。……イヤ此の世の中の事を、さう一々物質的に解しては、少しも面白くは無いからぬエ。

▲僕は生憎眼の性が良いから、さう云ふ事は解らないが、極の近眼の人に聞いて見ると、その自由は無論であるが、まゝその視力の悪い爲めに却て普通の眼では見えない、意外の色彩や輪廓が見えて、大いに美を感ずると云つて居る。

▲之に反して、此處に顯微鏡の様な、非常に眼の良い人があるとす。所がその人は、いくら美しい花を見ても細胞組織まで、見え透て、少も美を感じない斗か、偶々甘い物を食はうとすると、その邊に遊離して居る。塵埃や微菌が眼に付いて、

何うしても手を出す事が出来ない、それでは不自由な話だ。

▲所詮 此世の中の事は、ある點までは空想で持たものだ、その空想と云ふ點に美しい處もあり楽しい處もある。そう頭から理屈斗りで、子供の教育をしやうと云ふのは、百坪の地所へ百坪の家を建てて残らず教場にしやうと云ふ類だ。

▲一日に三度の飯も、米ばかりでは濟まされないお菜も入れば、漬物も入る。また食後には菓子も良い、果物も妙だ、されば子供の教育も只智慧斗り授けた處で、ロクな人間に成れるものでも無い

▲お伽噺の彼等に於ける、そのお菜で無ければ少くとも食後の菓子である。果物である。………但しその菓子も果物も、共に滋養を旨としたもの只甘い斗りを主として、其實胃腸を害す様なものは

之を避けるに論の無い事だ。

▲かくて善良な菓子、果物ならば、人も食つて決して害の無い斗りか、大いに消化を助けまた、血液を肥やすに相違無い。丁度その通りに、お伽噺の健全なものならば、只に教育に補益する斗りで無く却つて更に之が爲めに、一種の精神教育を施すに至るのだ。

▲此頃學生の墮落問題が起つたりまた煩悶問題が聞える様だ、共に甚だ面白からぬ現象だが僕に云はせると、墮落と云ひ、悶煩と云ひ、共に學生の分を忘れた話、即ち彼等が年齢不相應に身を持たうとするから、遂にかう云ふ事になるのだと思ふ。

▲子供は子供らしくして居れば、何等の危険氣も無い筈ではないか、それを強いて大人ぶらうとする生若い身で人生を解かうとしたり、部屋住の癖

にはや人情を味はうとする、それが抑も間違の初
 まりだ、僕は此點から云つても、子供には子供の
 文學、即ちお伽噺を勧め度いと思ふ、ホイこれは
 飛んだ我田引水、叱られない中にこれで失敬。

先頃の新聞に左の記事があつた。物見高いのも斯ふ
 なるうちと滑稽である。

◎他人の癩が災難の種 茨城縣田中子之吉といふは
 一昨日午後四時頃妻お辰を連れ芝公園に赴き増上寺
 前に差懸るとお辰は急に癩を起したるより種々介抱
 の上來合せたる巡查の手にて醫師の治療を受けたる
 が御苦勞にも人の疝氣を頭痛に病んで癩だくと見
 物して居たる同區西應寺町白米蘭西山吉太郎と云ふ
 は何者にか九圓九十三錢入の靴を拘取られ泡喰つて
 居る處へ黒山の人たかり何事ならんと一人の男増上
 寺前にて電車から飛下り人事不省となり漸く蘇生し
 苦い顔して立去りたるが廣い東京とは云へ酔狂な人
 達も有つたもの哉

子供と浮和雷動

芙蓉生

子供と云ふものは氣を付けて見れば見る程面白い
 もの滑稽なものである。此間も近所の長屋に居る
 水屋の台所で三つ許りの女の子が始めは盥の中
 水だらけな雑巾を振舞はしてかとなしく遊んで居
 たが頓ての事に傍の摺鉢の中に入れては出し出し
 ては入れて遊んで居た。此次は何をするかと思つて
 居ると今度は雑巾の代りに自身が摺り鉢の中へと
 入へり込んだ。そしていとぞこの狭い爲めに鉢の
 揺るのが面白くてがた／＼やらかして居たが頓が
 て殊に鉢は一搖ぎすると共に流しの勾配を滑つて
 向ふに走り子供はづでんととうと仰向け様にしりも
 ちついで水だらけのちゃん／＼をながめながら
 ワアと云ふわめき之に次いで母親が叱咤の聲隣